

子どもの生きがい



立川多恵子

珍しく夫婦で旅に出た。

その日は、偶然、登りだけの自然研究路を歩くはめになってしまった。私たちは急坂をふうふういいながら登った。主人は、クラブを持たないで、こんな山道を登るのは苦手だとぼやいている。私が「子どもは、この位の登りでないと満足しないと思うわ」というと、「そうだね、子どもは抵抗感を求めて生きていかなものだからな」といった。とにかく二人とも大汗をかいて、頂上に出て、四方の山の美しさに感嘆しながら、残りの平坦な道を軽い足どりで歩いた。帰宅して、妙に主人の言った『子どもは抵抗感で生きている』という言葉が心に残った。

最近になって、子どもの生きがいについて書いてほしいという原稿依頼を受け、この機会に『子どもの抵抗感』ということ

に焦点をしばって考えてみることにした。

わが家の子どもたちはすでに幼児期を脱して、小学校六年生と、三年生になっている。

かけっこ

先日、夕食時に、下の娘の美香が「わたし、リレーの選手に選ばれたの」といった。「え、それはよかったね、おめでとう」というと、「でもね。クラスの女の子の中で、記録七番目でしょう。だから当り前」とえらそうにいった。「でも選手でしょう。頑張らなければ」というと、「まあね」という返事。

その翌日、私の帰りを待ちかねて、玄関先に飛んできた子どもは、「欠席していたA子ちゃんと、月曜日に競走してきめるんだって、大へん、練習しなくては」という。ゆっくり事情を

聞くと、欠席していたA子を交えて、選手全員がもう一度走ってみて、早い子から十人の選手を選びなおすそうである。

その翌朝から、自発的に早起きして、姉につきそわれて、家の周囲を、やや肥りぎみの体で、ふうふういいながら走る。

「ね、お姉ちゃん、記録伸びたかな」「そうね、大分わたしについて走れるようになったもの」

日ごろけんか相手の姉も大変優しい。妹を選手にすることに『はり』をもっている。

「お母さん、一緒に走って」「そうね、走ろうか」子どもに伴走する私に、美香は、「お母さん、もっと本気でないと、つまらない」と抗議する。

「ようし」。私は実力を出して、ぐんぐん上の娘の理恵にせまる。私の後を美香は、はあはあいいながら追ってくる。門前に着いた時、「やっぱり早いね、お母さんは」という子どもの目は輝いていた。いつまでも幼いと思ひ、保護する立場をとった母親が、子どもと思いきりかけることによつて得た、子どもの成長の喜びをかみしめながら、いろいろ考えてみた。

簡単に決ってしまった選手、そのあとに突然あった先生の新しい指示は、子どもに「再び選手に選ばれるだろうか」という一時の不安感を与えた。その結果、「なんとかして、選手になりたい」という願望が生まれ、その願望を達成するため、子ども

の中から、一つの方法が生み出された。

練習場面での努力の過程で、子どもは汗を流し、自分の計画を実行していく喜びと、抵抗感の中に、自信を得、母親に本気でつき合うことを要求する。

子どもは、母親のあとを追って走りながら、汗を流す。練習は、再び選手にえらばれることを目標にしているが、練習そのものの中に、下の娘も、上の娘も、そして母親の私も生きがいを感じる。練習中、汗を流して真剣に競い合った経験から来る抵抗感によるものである。

月曜日になって、予定通り、競走して、十一人中四位を走りぬいた美香は、再びみごとに選手に選ばれた。

山のぼり

夏休みが終わって、美香が『夏休みの思い出』という作文を書くことになった。なかなか着手しないので、きつかけを作つてやろうと「夏休み一番おもしろかったことは何かしら」と聞いた、すると即座に「山のぼり」と答えた。

三泊四日で鹿沢高原の国民休暇村へいき、宿に到着するとすぐ、一七〇〇メートルの山に登った思い出である。村上山の五合目にきた時、子どもはくるっとふりむいて、「もうわたし帰る」といった。私も、同行の私の妹も驚いて、もう少しだから

がんばろうねと励ました。子どもはすわりこんで動こうとしない。仕方がないので、手持のあめを出して与え、「雲の中を歩いて行っているのよ、すごいでしょう」など励ましながら、つれて登ったが、時々、すわりこむので困ってしまった、それも頂上に登りきった時は、ご満悦で、ニコニコして帰路はかけ足で下山していった。

次の日は一九〇〇メートル前後の湯の丸山に登ったのだが、この日はふもとの牧場からつれの従姉と二人で目標を立て、「あの大きい木まで、がんばろう」とか、「黄色い花がみつかったらお休みね」とか、適当に自分たちで、登山の目標を立てて登っていった。結局ほとんど休むことなく、頂上付近の見晴し台まで一時間半位の道程を登りきった。次の日はあいにくの雨で、一日宿に閉じこもっていたが、最終日にも、都合であとからやって来た姉の理恵を交えて、三時間の道程を黙々と歩きつづけた。

この旅の思い出が、美香にとって、もっとも楽しい思い出になっていたのでその作文からである。鹿沢高原行きの後、家族で九十九里浜にあそんだり、千葉の子どものくにのバラエティに富んだプールで泳いだり、子どもにとって、楽しそうな思い出のいくつかが、存在したように思われたが、美香にとって一番楽しかった思い出は、歯をくいしばって、汗をか

きながら登った山の思い出だったのである。

自らの意志で選んだ困難、それをのりこえる努力の過程で起こる抵抗感、その時点で子どもに生きがいを感じさせると共に、成就の喜びを育てていると考えられる。

子どもは、ある目標に向かって努力する。そこに抵抗が存在し、それをのりこえた時、初めて、充実感や、満足感を得ると考えていた。しかし、子どもの生活をじっくり見ていくと、どうやら、抵抗感を感じる過程で、すでに生きがいを感じている。しかも、その抵抗感は生理的な快感につながる場合が多いのは興味深い。

子どもが行動を起こす。この場合、その子どもがなんの努力もなく、仕とげられるような時には、充実感も、満足感も起らない。

そこで、もう一度子どもを見つめると、意識的な場合も、無意識的な場合もあるが、自ら努力目標を作って、行動していることを発見する。子どもはその努力目標に向かって、困難をのりこえる過程で、抵抗感を体験し、それが生きがいにつながり、次の目標を育て、再びその目標に向かって努力を重ねることによって、ある仕事をなしとげることができ、新しい充実感が起こる。

こうしたくりかえしが、子どもの体を育て意志を育てていく。

百円玉の話

夕方、前から靴をほしがっていた母をつれて駅前まで買いにいった。比較的よい靴がみつかったので、すぐもどった。

室内でなれない靴をはいて歩く練習をしていた母が、急に父に「おじいちゃん、テレビの上のお金使った？」と聞いた。父は「いや」という。私にも、「ママ、お金いじった？」と聞くので、「いいえ」と答えた。そんなやりとりをしていると奥の部屋から美香が出てきて、「これ上げる」と自分の財布から百円玉をとり出した。私はとっさになんのこともわからなかったのだが、母はすぐ美香の手を握ると、正座して、両ひざを合わせて向かい合い「美香ちゃん、このお金どうしたの」と静かに聞いた。子どもは赤い顔をして「あの、あの」とつまっている。母はいつにない真剣な目つきで、子どもの手をもう一度しっかり握り、「大人に黙ってお金を持ち出すと、どろぼうになるのよ」「どろぼうは警察へ連れていかれちゃうのよ。おばあちゃんはその子に育てた覚えはない」と目に涙をためて、美香を見つめる。美香の目からも、大粒の涙がこぼれる。私も、その光景に吸いこまれるように黙ってすわりこんだ。

その時間は、どの位であったか、私には見当もつかなかったが、長い時間のように思えた。「わかったね、わかったね」母

の声がして、美香は泣きながら、自分の部屋に戻った。しばらくして行つて見ると、机に向かって勉強していた。

三番目の話は、一番目のかけっこや、二番目の山のほりで、子どもが経験した抵抗感とは異質なものと思われる。

子どもが自発的に目標をたてて努力する過程で起こる抵抗感のように快い経験とはいえない。この場合の抵抗感、子どもの行為に対して、大人側の受けとめ方によって子ども側にも起こった抵抗感であり、外側からみるとむしろ子どもにとって苦い経験と考えられる。しかし、この経験を子ども側からも一度考えなおすと、日ごろなにくれと子どもの世話をしている祖母が真剣に涙を浮かべていつてきかせ、共に涙を流すことによつて起こる抵抗感、必ずしも、子どもに苦痛のみを与えているとは考えられない。そこにも、ある種の快い抵抗感が存在しているように思われる。この抵抗感が、祖母と孫とのつながりを一層深めていく結果になったのではないかと考えられる。

叱責された後、朝からどうしても、着手できなかった計算練習に熱心に取りくんている子どもの姿に、こんな形の抵抗の尊さを知った。

子どもはさまざまな場所で、さまざまな抵抗を感じる。快い経験につながる場合が多い。その抵抗感が、子どもに生きがいを与え、子どもの成長の核になっていることを知る。